

Title	明治後期における国民形成としての玩具戦略：三越第1回児童博覧会を通して
Author(s)	ベレジコワ, タチアナ
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 79-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69217
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

明治後期における国民形成としての玩具戦略

－三越第1回児童博覧会を通して－

ベレジコワ タチアナ

1. はじめに

1904（明治37）年12月にデパートメント・ストア宣言を出した三越呉服店は、日本初の百貨店となり、近代日本において大きな役割を果たした。当時の三越は、新しい商品販売スタイルであった陳列販売、正札販売などを導入しただけではなく、新しいライフスタイル（消費生活、近代的洋風的生活スタイルなど）を提案し、さらに様々な分野の研究者が集まる場でもあった。1905（明治38）年に三越は「流行研究会」ⁱという研究会を立ち上げる。そこには様々な分野の著名人が集まり、新商品の開発や公開講演、さらには展覧会の企画などの活動が行われた。この研究会は、こうした活動を通じて新しい流行を研究すると同時に、自分たちで新しい流行を作ることも目的にしていた。また、1909（明治42）年から発足された「児童用品研究会」ⁱⁱは、児童用品蒐集、考案創作の奨励、優良品の普及、製品の監査を行っていた。そして、1909（明治42）年4月1日から5月15日まで東京日本橋の三越本店で「第1回児童博覧会」が開催されることになった。この「児童博覧会」は、絶大な人気を得て、毎年のように開催されるようになるⁱⁱⁱ。そのとき、出品された様々な児童用品のなかで、人形と玩具が重要な位置を占めていた。これは「児童用品研究会」の会員によって選定されたものであり、外国製のものも日本製のものも含まれていた。

この「児童用品研究会」の活動や「第1回児童博覧会」は、先行研究でどのように紹介されているのか。まずはそれを見てみよう。

神野由紀（2015）は、主に消費社会、商品化という視点から、玩具を含めた子ども用品を考察し、商品化された子ども用品には、三越の商売戦略と消費社会の特徴が凝縮されていることを指摘している。

岩淵令治（2014）は、江戸時代から作られた日本伝統人形や玩具をはじめとする「江戸趣味」を商品化し、客に勧めることは、当時の三越が果たした大きな役割の一つであると指摘している。三越のなかで復活された様々な江戸時代の美術品などを「良い趣味」と結びつけ、近代風、モダン風のものとして販売したという。

大島十二愛（2002）は、「三越児童博覧会」以前に行われた子どもや子ども用品関係の博覧会や展覧会の一覧を示し、当時の新聞記事から見た「第1回児童博覧会」に注目する。特に、視覚メディアの視点から三越の「第1回児童博覧会」を捉え、メディアとしての博覧会を考察している。

つまり、消費社会や商売戦略、「江戸趣味」の復興、視覚的メディアとしての三越児童博覧会が先行研究では考察されているが、出品物の一つであった玩具に注目した研究は管見の及ぶ限り見いだせない。

しかしながら、三越の「第1回児童博覧会」は、利益や教育に関する知識の普及以外にも、将来を担う「良き国民」を形成するという目的があったと考えられる。それに従った玩具選定がなされているからだ。本稿では、従来の研究では看過されてきた玩具の選定基準や、その背景などを詳細かつ具体的に示す。

本研究は明治後期における玩具が国民形成に託された役割の一端を明らかにするものである。より具体的に言うと、「児童用品研究会」の会員は玩具にどのような使命を託し、どのような効果を期待して、玩具選定を行ったのか。さらに、彼らが「第1回児童博覧会」を通じて観客に何を伝えようとしたのか、この博覧会の開催をきっかけにして1909(明治42)年に出版された『みつこしタイムス(臨時増刊)』第7巻第8号の記述を通して、その様相を見ていきたい。

もちろん、その後、第2回から第9回にかけての三越児童博覧会やその他の児童博覧会において出品された玩具の種類や評価、役割なども注目に値するが、紙幅が限られているので、今回は「第1回児童博覧会」についてのみ論じる。

そのために、まず、近代日本において児童博覧会がどのような背景のなかで誕生したのかを簡単に紹介してから、本研究の論点である「良い玩具」と「良い国民」について論じたい。

ちなみに、本稿の引用は、読みやすさを考慮して、必要な箇所以外はふりがな(ルビ)を省き、二字以上の繰り返し記号に該当する箇所にはそれに相当する文字を当て、そして旧字を通用するものに改めたことを本論に入る前に断っておく。

2. 三越児童博覧会の始まり

明治時代になると、西洋諸国から新しい教育知識や思想が日本に流入し始める。たとえば、初等教育の重要性を唱え、その基礎を築いたスイスの教育実践家 J.H. ペスタロッチ、そして彼の研究結果を応用し、展開した幼児教育の祖とされるドイツの教育学者 F. フレーベルが注目された。彼らは、子どもは大人と異なる独自の存在であり、子どもの本質を研究し、円滑な成長・発達を保護しながら、子どもを育てなければならないと考えていた。このような考え方は、次第に日本で普及し、子どもは大切にすべきものとして見なされるようになった。たとえば、「第1回児童博覧会」の審査委員の一人であった教育者の高島平三郎は、国家の進歩にも影響を与える子ども教育の重大さについて以下のように述べている。

元来子供を大切にす国家は段々榮へて行き、子供を粗末にし子供に重きを置かぬ国家は段々衰へて行くといふことは、歴史が明かに證明して居ることであります。我国が今日のやうに段々盛になつて参りましたのは、少くとも東洋に於ては我国が一番子供を大

切にし子供に注意するからであります。現に児童博覧会と云やうなものが成立て非常に盛んであつて子供に関する品物に斯る進歩を見るやうになつて来たのは論より證拠^{しょうこ}我国人が子供に重きを置くからであります（高島 1909、pp. 73-74）。

つまり、子どもを大切にすることは、国家を進歩させることに繋がるものだ、ということを高島は述べているのである。

こうした背景のなかで、「児童博覧会」という事業が考案され、実施された。もちろん、明治期の日本において児童用品の展示は、三越児童博覧会から始まったわけではない。1877（明治 10）年から 4 回にわたって東京の上野で「内国勸業博覧会」が開催され、そのときにも児童用品が展示された。「内国勸業博覧会」はこの後も続いていくが、1905（明治 38）年に開催されたパリ「こども博覧会」に刺激を受けた日本の教育学者・樋口勘次郎と沼田藤次は、日本でも子どもを中心とした博覧会の必要性を唱え始める（沼田 1906、p. 43）。その結果、1906（明治 39）年 5 月に東京上野で教育学術研究会主催の「こども博覧会」^{iv}が、10 月には大阪の府立博物場で「こども博覧会」が開催されるなど、「こども博覧会」が相次いで開催された。これらの博覧会は、子どもを中心にして企画されたものであり、子ども関連のもののみが出品された博覧会であった。その後、1908（明治 41）年に三越の「子供部（小児部）」が新設され、1909（明治 42）年 4 月 1 日から 5 月 15 日まで東京日本橋の三越本店で「第 1 回児童博覧会」が開催されることになったのである。

この博覧会の実行を促したのは、1901（明治 34）年にベルリンで開催された「児童博覧会」を見物し、それに深く感動した巖谷小波であった。彼が望んだ「児童博覧会」は、一般の親や子ども、教育者の関心を引くような「玩具や絵本の他に、子供の物なら、頭の先から、足の先まで、何でも揃ふと云ふ様な」（巖谷 1909、p. 158）ものであった。

この博覧会は、子ども用品という新しい市場の開拓を通じて販売を拡大させることだけを目的としたものではなく、公開講演や展示を通して子どもに対する一般市民の関心の向上と、教育知識の普及を目的としたものであった。さらに、考案創作の奨励や優良品の普及、製品の監査を通じて国内製品を改良するという目的もあったという（菅原 1909、pp. 136-152）。これに加え、将来を担う「良き国民」を作り上げ、それによって日本を文明国に導く礎を作るという目的もあったと思われる。なぜなら、「第 1 回児童博覧会」に際して発行された『みつこタイムス』第 7 巻第 8 号（1909（明治 42）年）には、以下のような記述にそうした目的が看取できるからである。

児童は帝国将来の運命を双肩に荷ふべき少国民なり、此等の少国民の為に必要なる衣服、調度、図書、玩具等の各品を蒐集して公衆の展覧に供し、一面には昭代の家庭に清新の趣味を添へ他面には国民教育を助けて、児童品性の向上に裨益し、将来益々国運の

発展に貢献せんとするの目的を以て、三越呉服店の計画に成れる児童博覧会は、朝野諸名流の賛助を得て、茲に其開場式を挙げらる(大橋 1909, pp. 21-22)。

この目的を果たすために出品の審査と考案創作の奨励がなされ、「良き国民」を育てるための「良い玩具」が選定された。それは一面には「家庭に清新の趣味を添へ」るもので、他面には「国民教育を助けて、児童品性の向上」に利するものであり、そうすることによって将来ますます「国運の発展に貢献」するような人材を作るために行われたことだったのである。

次項では、明治後期の日本における玩具に託された使命と、三越「第1回児童博覧会」に携わった人たちの玩具に対する期待に関して述べたいと思う。

3. 「良い玩具」と「良い国民」

玩具の進歩でその国の文明発展度が測れるという考え方は、明治期以降の日本において児童研究者の間で広く知られていた説であった。これについて述べている一つの記述を例として挙げてみよう。

其の玩具に於て果して高尚な複雑なものであれば之れに依つて自ら其の国に対する観念が変るのであります。吾々が野蛮人の製作した玩具を見れば尊敬の念は起らぬが、^{どいつ}独逸辺りから這入る立派な機械的の玩具を見れば其の国の人間が科学的、秩序的であると云ふことは想像が付きませぬ。(中略)之に反して此の国は緻密な国である、機械的である、文明な国であると云ふ観念を^{ちよつと}鳥渡持たせますると、其後起る商売取引上に於て非常な優勢を得るのであります(山脇 1909, p. 45)。

この記述からわかるように、ある国の玩具を見ればその国の人間が「科学的」であるのか、あるいは「秩序的」であるのかといったことがわかるというのだ。つまり当時、玩具はその国の文明度や性質を測るための測定器のようなものだったのである。逆にいえば、玩具を進歩させることによって、国際市場の信頼は厚くできたり、文明度を上げたりすることが可能になると彼らは考えていたのである。

こうした考えは、何も三越「児童用品研究会」だけに見られるものではなかった。その証拠に、玩具によってその国の文明度を判断できるという趣旨の投書が当時の新聞にも掲載されている。たとえば、次のようなものだ。

厘米利加などの玩具の高尚にして又其巧なるにハ誰も一驚を喫せざるを得ないが又朝鮮^{など}杯の玩具の其幼稚にして無趣味なるにハ是又一驚を喫せざるを得ない、玩具の巧と巧な

らざるとに依つて確かに其国の文明の度がわかる（『読売新聞』1906年1月4日朝刊第6面）。

先の引用文と同様、玩具によって文明度が測定されている。アメリカ玩具は「高尚」で「巧み」であるが、朝鮮玩具は「幼稚」で「無趣味」であるという。そしてその国の玩具の精巧度でその国の文明度がわかるというのだ。

こうした考えから、自国の玩具を進歩させることによって、教育が進歩し、それがひいては国の進歩にもつながる、という考え方が次第に普及したのである。そのため、「良い玩具」とはどういうものなのかが研究されたり、「良い玩具」とはどんなものかという定義づけがなされたり、それに相当する玩具が生産、販売されたりした。さらには、「良い玩具」の必要性を理解させる啓蒙的な運動にも、児童教育学者や玩具研究者は尽力するようになったのである。

ここで、「良い玩具」の特徴と、「第1回児童博覧会」の開催に携わった人物が望んだ効果についてまとめておきたい。「良い玩具」の特徴は、大きく五つに区分できる。

一つ目の特徴は、子どもの年齢に相当する玩具であること。こうした考え方は、当時広く普及されていたものだ^v。「第1回児童博覧会」に携わった人物たちも、年齢に応じ、適切な玩具を与えることの重要性を唱えている。こうして、年齢に応じて簡単な玩具から徐々に複雑な玩具を与えていくと、「段々子供に実物教育の知識」（山脇 1909, p. 42）が玩具によって付与され、また「玩具に依つて組織、系統、秩序、整頓と云ふ観念」（同, p. 44）を与えることができるというのだ。

それだけではない。「人間が食物を得る順序に随つて、子供の遊戯が進んで来る」ということも考えられていたようだ（高島 1909, p. 86）。つまり、人類が食物を得る方法^{vi}が発展していくのと同じように、子どもの玩具に対する意識や子どもが玩具に求めていることは、その子どもの成長とともに変わっていくというのである。高島平三郎によるとこの順番は、人間の進化と同様のものだというのだ。つまり、植物の根や果物を採って食べるのが最初の段階。その次に動物を食べるようになり、やがて狩猟期の段階に入る。その後牧畜農業の段階へと進み、そして大きな戦の段階を迎え、最後には商工業が発達する段階に至るというのである。同じような順番で、子どもの遊戯も変化する。5歳までは「感覚を働かす遊戯」であり、それ以降は「鬼遊びを為し、戦さゴツコをする」ことや「犬を可愛がるとか馬を可愛がるとか、或は地面を掘つて遊ぶとか」といった農業牧畜に相当する段階に入り、「最後に芝居を見るとか或は玉突をするとか、或は美術工芸を愛するとか云ふやうな事は、文明に進んだ工商業の盛になつた時代の表現で、二十歳以上の頃になつてから現はれて」くる、という（高島 1909, pp.86-87）。上記の段階を参考にしながら玩具を秩序的に与えると、最終的には文明の人間に至ると高島らは考えた。このことから、当時の日本人の文明国への憧憬がいかに強かったのかがよくわかるだろう。

「良い玩具」の二つ目の特徴は、子どもは大人と異なる独自の存在であるということが強く意識されていること。つまり、製品を作るときには、「子供を標準にして」作らなければならない(高島 1909、p. 80)のである。なぜなら「良い玩具」がある国がすなわち文明国であるからだ。逆に子どもを小さい大人として意識している国は、未開・野蛮の国なのだ(坪井 1909、pp. 54-58)。また、子どものためのものは「実用を旨として簡単であり且つ便利な物」(高島 1909、p. 75)であり、かつ「真を失はない」物(同、p. 79)でなくてはならない。つまり実際のものに近くて、写実的な玩具と人形が必要なのだ。ここからも、当時、子どもがどう意識されていたのか、子ども用の物質がどこまで発達しているのかといった点が、その国の文明度を測る尺度であったことは明らかだろう。

三つ目の特徴は、丈夫で質がよく、精密に作られていること。つまり、壊れやすい玩具を与えると、子どもも同じように変わりやすくして軽薄な心を持った人間になったり、ものを大事にせず、粗末なものばかり作る人間になってしまうというのだ。そうした考えが如実に現れている文章を次に示した(ただし、括弧の文章は引用者(稿者)が補ったものである)。

子供に与へる所の玩具の性質が複雑になり、緻密になり、高尚になつて来ると、自ら商品に対する影響も亦変つて来ると思ひます。今日日本の商品が海外に於ける不評判は粗製濫造と云ふことであります。此粗製濫造は私の考で見ますと、(中略)子供は之(ここでは玩具を指す)に対して甚だ軽視して直ぐに壊して仕舞ふ習慣があるから、今日の粗製濫造は日本人が小さい時に受けつつある教育の結果でありはせぬか(山脇 1909、pp. 45-46)。

つまり、当時、玩具製造でも大きな問題であった「粗製濫造」と日本製品の悪評は、それまでの教育や悪質な玩具のせいではないかと考える人がいたのだ。子どもに与える玩具を丈夫なものにすることで、子どもが大人になっても粗製品を自然に作らなくなるという、ある意味単純なロジックがここに見られる。さらには、子どもに美しいものを与えると、自然に大人しくなり、行儀にも影響するという意見もあった(高島 1909、p. 78)。玩具の質が人の質を決める。そうした考えがあったのだ。

四つ目の特徴は、玩具によって、五感の発達や知識の提供だけではなく、道徳上の考え方を抱かせることができ、体力や好奇心、記憶力、想像力、同情、美情などが育てられ、悪い性格を直すこともできるものであること。たとえば、「子供の性質に依りまして弱い子供には其弱い心を直すやうな玩具を与へ、又癩癩持の子供にはそれを直すやうな玩具を与へてやる」と高島平三郎は述べている(高島 1909、p. 92)。「良い玩具」を選定することによって、理想に近い人間が育てられるというのだ。

五つ目の特徴は、人種的な偏見をなくすということである。これについて述べている一つの記述を例として挙げてみよう(ただし、括弧の文章は引用者(稿者)が補ったものである)。

(本展覧会の出品物は) 諸国の物が雑つて居る。^{ことさ}故らに調査する者は格別、普通の観覧者、殊に子供に在つては、何れが何処の物、何れが何処の風と一々に見別ける事はせず、唯色々の物が有ると感ずる丈で有りませう。(中略) 要するに子供同士の間には大人同士の間に見る様な習慣だの感情だのと云ふ窮屈な制限が立つて居ないので有ります。子供が児童博覧会の列品を見て居る場合には人種的偏見は存在しない。斯の如き事に慣れて来ると、長じた後に児童用以外の物を見ても同じく人種的偏見を挟まぬ様に成る。更に進んで大人が諸種の物を見るに当つて国や人種の事を判断の^{こんきよ}根據としない様に成れば、世の中から異人種憎悪の念を取り去つて仕舞ふことも出来るで有りませう(坪井 1909, pp. 111-112)。

つまり、風俗習慣の束縛の力は大人に対してはほとんど絶対的なものであるが、子どもの間にはそうした窮屈な制限はまだ存在しない。だからこそ「児童博覧会」で陳列する玩具は、どこの国のものか、誰によって作られたものかにはあえて示さないという方針が採られた。子どもがただ玩具を見て楽しむことによって、自然と人種的偏見を持たない人間になるというのである。それは子どもがまだそうした偏見を持たない存在であるからで、玩具の面白さなどを素直に受け取ることができるからだ。こういったトレーニングを長く続けることによって、人種的偏見のない大人が増加する。そう彼らは考えたのである。

4. おわりに

以上に見てきたように、明治後期の日本において、玩具に託された使命は絶大であったことが明らかになった。「良い玩具」を与えることにより、健康な体と、優しい心、そして美德を兼ね備えた、理想に近い人間が育つというのが、一部の教育関係者にとっては主流となる考えであった。さらに、文明的玩具(丈夫で、写実的で、質の高い、精密なもの)を作ることによって、文明的な人間を育てることが可能になり、それによって文明国の基本作りができると考えられていたのである。

当時、世界の一等国の仲間入りを目指していた日本にとって、文明的な人間を育成することがいかに切実かつ緊急の課題であったかがわかるだろう。玩具生産面でも、また子どもの教育の面でも、一刻も早く文明国の仲間入りをしたいという強い願いが見て取れる。

また人種的偏見のない人間を育てるという考えは、現代に生きる私たちから見ると、過度に理想主義的なものに見えるかもしれない。だが当時の日本にとっては非常に重要な課題であり、「児童博覧会」に携わった教育学者は、一般の人たちや教育者たち、そして子どもたちに、人種的な偏見をなくそうというメッセージを伝えようと努力していたのである。

上記のような考えが、はたして三越「第1回児童博覧会」に携わった教育関係者だけが共有していた特有の考えであったのか、それとも当時、すでにある程度普及していた一般的な

玩具教育の一部であったのか、という疑問がおそらく出てくることだろう。この疑問に対して正確に答えるには、明治期の日本における子ども教育と近代玩具観の成立過程と発展を徹底的に研究しなければならない。本稿は、紙幅が限られているので、あえて三越「第1回児童博覧会」についてのみ論じることにした。したがって、ここでは「第1回児童博覧会」を取り巻く時代背景と、当時の玩具研究の概要について、最後に少しだけ説明しておきたい。これによって、この博覧会が果たした役割がより明確になるとと思われるからだ。

三越「第1回児童博覧会」が開催された時期は、幼児教育と玩具が密接な関係をもつことが社会通念になった時期であったことを、まずは指摘しておかなければならない。これについては、是澤博昭 2009 で論じられているので、詳しくはそちらを参照いただきたいが、今、その一部を紹介しておく、日本において小学校入学前の幼児が注目されたのは、明治20年代～30年代前半であり、明治の終わり頃から大正にかけての間は、幼児教育において玩具が不可欠であるということが社会通念となったという(是澤 2009, pp. 210-211)。つまり、三越「第1回児童博覧会」が開催された時期は、玩具が幼児教育の立場から注目され、重要視されるようになった時期であったのである。そして、この考えは教育関係者だけではなく、一般家庭も共有していた通念であった。

しかし、是澤 2009 が注目しているのは、玩具の情操・道徳教育の効果というより、「教育玩具」の知的発達を促進させるという効能であった。したがって、たとえ明治後期、幼児教育と玩具が密接な関係をもつことが、すでに社会通念となっていたとしても、玩具に寄せられた期待は、研究者によってそれぞれ異なっていた、という可能性があるのだ。

三越「第1回児童博覧会」に携わった人物たちが、玩具の知的教育の効果だけではなく、心を養うという効果も指摘していることは注目に値する。この時期の玩具は、情操・道徳教育の効果はまだ広く普及されておらず、斬新な考えであったのではないかと今は推測しておきたい。この仮説の真偽については、今後の研究において考察する。

さらに、三越「第1回児童博覧会」が行われた時期は、欧米諸国の教育思想において、玩具を与えることによって知識の発達や情操の涵養を期待できるということが、著名な研究者によってすでに提唱された時期であったことを、ここで改めて指摘しておきたい。

特に、19世紀の半ばにおいて、世界初の教育遊具の考案と作成に取り掛かったドイツの教育学者フリードリヒ・フレーベルの玩具理論が多大な影響を及ぼしたと思われる。フレーベルは子どもに秘められている想像力と創造力を促進させるには、「正しく」与えられた教育上「有効な玩具」の重要性を提唱し(莊司 1981, pp. 802-803)、さらには人形遊びが子どもの人間性の発達を促進させると説いた。彼によると、人形遊びをする子どもは、思慮深く注意深い両親や保育者としての自覚を、自然に獲得するというのである(フレーベル著、莊司訳 1981, p. 145)。

フレーベルの玩具教育は、明治10年代の日本に移入された。その普及については、昭和期の教育心理学者・牛島義友が以下のように述べている。「フレーベルの恩物(筆者補:フレ

ーベルが考案した教育遊具) 中心の保育は我国でも明治、大正にかけて長く行はれてきたもので、子供が保育室に居る時は殆ど恩物ばかりをやつてみた位である」(牛島 1943, p. 122)。つまり、フレーベルの思想は日本の教育研究にも大きな影響を与えていたのである。そして、三越「第 1 回児童博覧会」が開催された 1909 (明治 42) 年は、フレーベルの思想が広く普及していた時期であったため、三越「第 1 回児童博覧会」に関わった教育関係者たちもその影響を受けたものと推測できる。その具体的な影響や、そのほかの理論との関係性などについては、別の機会に論じたいと思う。

三越「第 1 回児童博覧会」に携わった人物の考え方が、それ以降の三越児童博覧会でどのように変説していったのか、という点についてはまだ明らかにできていないが、これも実に興味深い問題である。したがってこの点も、今後の課題としたい。

また、明治後期・大正期は三越主催以外にも多くの児童博覧会が開催された時期であった。それらの児童博覧会が、どのような目的で開催され、観客にどのようなことを伝えようとしていたのか、三越児童博覧会の場合と比較しながら、その共通点と相違点を今後の研究によって明らかにしたいと考えている。

参考文献

- 巖谷小波 (1909) 「私と児童博覧会」『みつこしタイムス (臨時増刊)』第 7 巻第 8 号、三越呉服店、pp. 157-160
- 岩淵令治 (2014) 『「江戸」の発見と商品化-大正期における三越の流行創出と消費文化-』岩田書院
- 牛島義友 (1943) 『愛育の玩具』協同公社出版部
- 大島十二愛 (2002) 「メディアとしての博覧会-みつこしタイムスにみる「文化の展示場」三越児童博覧会-」『新聞学-文化とコミュニケーション-』第 18 号、同志社大学大学院新聞学研究会、pp. 43-66
- 大橋新太郎 (1909) 「答辞」『みつこしタイムス (臨時増刊)』第 7 巻第 8 号、三越呉服店、pp. 21-22
- 川口仁志 (2002) 「明治末の地方における子ども博覧会について」『九州造形短期大学紀要』第 22 巻、九州造形短期大学、pp. 33-46
- 川越仁恵 (1998) 「『郷土玩具』の誕生-伏見人形の民俗誌的考察を通して-」『列島の文化史』第 11 号、日本エディタースクール出版部、pp. 91-125
- 是澤博昭 (2009) 『教育玩具の近代-教育対象としての子どもの誕生-』世織書房
- 是澤優子 (1995) 「明治期における児童博覧会について (1)」『東京家政大学研究紀要』第 35 集、東京家政大学、pp. 159-165
- 神野由紀 (2015) 『百貨店で<趣味>を買う-大衆消費文化の近代-』吉川弘文館

- 荘司雅子(1981)「解説」『幼稚園教育学』(フレーベル全集)第4巻、玉川大学出版部、pp. 802-803
- 菅原教造(1909)「児童博覧会感想」『みつこしタイムス(臨時増刊)』第7巻第8号、三越呉服店、pp. 136-152
- 高島平三郎(1909)「児童研究と玩具の製作」『みつこしタイムス(臨時増刊)』第7巻第8号、三越呉服店、pp. 72-94
- 坪井正五郎(1909)「子供に関する注意の進歩」『みつこしタイムス(臨時増刊)』第7巻第8号、三越呉服店、pp. 50-58
- 坪井正五郎(1909)「児童博覧会と人種問題」『みつこしタイムス(臨時増刊)』第7巻第8号、三越呉服店、pp. 110-112
- 中村喜代子(2002)「こども博覧会の思想-三越児童博覧会の思想的背景に関する一考察-」『収集・展示-<もの>から<美術>へ』第44集、千葉大学大学院社会文化科学研究科、pp. 28-40
- 沼田藤次(1906)「こども博覧会は如何にして成りしか」『こども博覧会(日本の家庭臨時増刊)』第3巻第4号、同文館、pp. 43-48
- 福田ふみ(2009)「児童博覧会について-明治時代を中心に-」『博物館学雑誌』第35巻第1号、全日本博物館学会、pp. 85-95
- フレーベル著・荘司雅子訳『幼稚園教育学』(フレーベル全集)第4巻、玉川大学出版部、1981年、p. 145
- 山脇春樹(1909)「貿易上に於ける玩具の価値」『みつこしタイムス(臨時増刊)』第7巻第8号、三越呉服店、pp. 41-46

註

- ⁱ その会員のなかで玩具に関心を持った人もいた。たとえば、児童文学者でありながら玩具蒐集にも携わっていた巖谷小波、日本人類学者の開祖であり、玩具を含めた古物蒐集にも携わった坪井正五郎が例として挙げられる。
- ⁱⁱ 会員には、児童心理学者の高島平三郎、衛生学者の三島通良などの児童研究者が入っていた。
- ⁱⁱⁱ 1910(明治43)年に第2回児童博覧会が、1911(明治44)年に第3回、1912(明治45)年に第4回、1913(大正2)年に第5回、1914(大正3)年に第6回、1915(大正4)年に第7回、1918(大正7)年に第8回と続き、1921(大正10)年の第9回で終わった。
- ^{iv} この「こども博覧会」は、日本初の児童博覧会だとされている(是澤1995、p. 159)。
- ^v たとえば、1910(明治43)年10月2日から1911(明治44)年2月1日にかけて「子供に関するいろいろ」という題目で連載記事を出す春泥生は、「年齢と玩具」という項目でこれについて述べている(『朝日新聞』1910年10月5日朝刊第5面)。
- ^{vi} 当時、主流だったダーウィン進化論は、社会進化論を始め、様々な分野に当てはめられた。教育の場合は、ダーウィン進化論の影響を受けたヘッケルの「反復説」を子どもの教育に応用したのは、アメリカの心理学者スタンレー・ホールであった。彼によると子どもの発達の段階は人類進化発達の段階に相当するものであるという。